

令和三年度 専修大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注意

- 一、試験時間は五十分です。
- 二、問題は一ページから十二ページまでです。
- 三、答えはすべて解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
- 四、答えを書きなおすときは、きれいに消してから新しい答えを書きなさい。
- 五、問題用紙も、試験終了後回収します。

一次の文章を読んで、後の間に答えなさい。なお、出題の都合で改行を省いたところがある。(解答は全て句読点、記号も一字に含める。)

父はもともと学問の好きな人だった。勉強をすることが生き甲斐がのようなどころもあった。文学を愛好し、教師になってからもよく一人で本を読んでいた。家の中にはいつも本が溢あふれていた。僕が十代にして熱心な読書家になったのにも、あるいはその影響aがあつたかもしれない。学生時代の成績もかなり良かったようで、1941年3月に西山専門学校を優等で卒業し、そのあと京都帝国大学文学部文学科に入学している。もちろん入学試験を受けたのだろうが、仏教教育と修行に明け暮れる仏教系専門学校から京都帝国大学に移るのは、決して簡単なことではなかつたはずだ。

うちの母親は「あなたのお父さんは頭の良い人やから」と僕によく言っていた。父の頭が実際にどれくらい良かったか、僕にはわからない。そのときもわからなかつたし、今でもわからない。というか、そういうものごとにとくに関心もない。たぶん僕のような職業の人間にとって、人の頭が良いか悪いかというのは、さして大事な問題ではないからだろう。そこでは頭の良さよりはむしろ、心の自由な動き、勘の鋭さのようなものの方が重用される。だから「頭の良し悪し」といった価値基準の軸で人を測ることは——少なくとも僕の場合——ほとんどない。そういうところはアカデミックな世界とはかなり違っている。I それはともかく、父の学業成績が終始優秀であつたことだけは間違ひなかつたようだ。

それに比べると残念ながら(というべきだろう)、僕には学問というものに対する興味がもともとあまりなく、学校の成績は終始イッカンしてあまりぱつとしないものだった。だから当然のことながら、小学校から高校に至るまでの僕の学業成績は、それほどひどくはなかつたものの、決して周りの人々を感心させられるような代物cではなかつた。

II そのことは、父親を少なからず落胆dさせたようだった。自らの若い時代と比べて、「こんな平和な時代に生ま

れて、何にも邪魔されず、好きなだけ勉強できるというのに、どうしてももっと熱心に勉学に励まないのか」と、僕の勤勉とは言いがたい生活態度を見て、おそらく [A] 惜しく思っていたことだろう。彼は僕にトップ・クラスの成績をとってもらいたかったのだと思う。そして自分が、時代に邪魔をされて歩むことのできなかつた人生を、自分に代わって、僕に歩んでももらいたかったのだと思う。そのためにはどんなギセイも惜しまないという気持ちでいたはずだ。

でも僕にはそのような父の期待に十分こたえることができなかつた。身を入れて勉強をしようという気持ちにどうしでもなれなかつたからだ。学校の授業はおおむね退屈だつたし、その教育システムはあまりに画一的、抑圧的だつた。そのようにして父は慢性的な不満を抱くようになり、僕は慢性的な痛み（無意識的な怒りを含んだ痛みだ）を感じるようになった。僕が三十歳にして小説家としてデビューしたとき、父はそのことをとても喜んでくれたようだが、その時点では我々の親子関係はもうずいぶん冷え切つたものになつていた。

僕は今でも、この今に至つても、自分が父をずっと落胆させてきた、その期待を裏切つてきた、という気持ちを——あるいはその残滓*ざんしのようなものを——抱き続けている。ある程度の年齢を越えてからは「まあ、人にはそれぞれに持ち味⑥というものがあるから」と開き直れるようになったけれど、十代の僕にとつてそれは、どうみてもあまり心地よい環境とは言えなかつた。そこには漠然とした後ろめたさのようなものがつきまとつていた。今でもときどき学校でテストを受けている夢を見る。そこに出されている問題を、僕はただの二問も解くことができない。まったく [B] が立たないまま時間は刻々と過ぎていく。 [III] そのテストを落としたら、僕はとても困つた状況に置かれることになるというのに……。そういう夢だ。そしてだいたいの嫌な汗⑦をかいて目を覚ますことになる。

でも当時の僕には、机にしがみついて与えられた課題をこなし、試験で少しでも良い成績をとることよりは、好きな本をたくさん読み、好きな音楽をたくさん聴き、外に出て運動をし、友だちと麻雀マージャンを打ち、 [IV] ガール・フレンドとデートをしたりする方が、より大事な意味を持つことがらに思えたのだ。もちろんそれで正しかつたんだと、今

になってみれば確信をもって断言できるわけだが。

おそらく僕らはみんな、それぞれの世代の空気を吸い込み、その固有の重力を背負って生きていくしかないのだろう。そしてその枠組みの傾向の中で成長していくしかないのだろう。良い悪いではなく、それが自然の成りたちなのだ。ちようど今の若い世代の人々が、親たちの世代の神経をこまめに苛立たせ続けているのと同じように。

村上春樹『猫を棄てる 父親について語るとき』（文藝春秋）

*残滓：残りかす

問一 傍線部 a ~ e のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを平仮名で答えなさい。

問二 空欄 ~ に入る語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(ただし同じ選択肢は一度しか用いることができない。)

- | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-----|
| ア | あるいは | イ | および | ウ | しかし |
| エ | それでは | オ | そして | カ | もし |

問三 傍線部①「そこ」が指すものを本文中から七字で探し、抜き出して答えなさい。

問四 傍線部②「心の自由な動き、勘の鋭さ」と同等の内容を表す語として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 耐性 イ 習性 ウ 知性 エ 理性 オ 感性

問五 傍線部③「かなり違って」にあるが、何が「かなり違って」のか。漢字三字で答えなさい。

問六 空欄 、 には体のある部分を表す漢字一字が入る。それぞれに入る漢字を答えなさい。

問七 傍線部④「不満」とあるが、その内容を表す部分を本文中から五十五字以上六十五字以内で探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問八 傍線部⑤「無意識的な怒りを含んだ痛み」とはどのようなことによるものか。適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。(順不同)

- ア 仏門に入り、修行のために勉強を続けることがなくなかったこと。
イ 学校の教育のあり方が一様であり、個を押さえ込むようなものであったこと。
ウ 戦争一色の世の中になり、学問を続けることが困難になったこと。
エ 学業について、父の望むような結果を得ることができなかったこと。
オ 努力を重ねても良い結果を得ることができず、不甲斐ない思いをしたこと。
カ 自分がしたいことをやめるよう父に強制され、やめざるを得なくなったこと。

問九 傍線部⑥「持ち味」は、「僕」にとつてはどのようなことを指すか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 文筆家としての才能
- イ 学問を究めようとする熱意
- ウ 世渡りの上手さ
- エ 一人の人間としての高潔さ
- オ 商人としての勘

問十 傍線部⑦「汗」とあるが、「汗」と組み合わせるときに慣用句として成立しない語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 握る
- イ 垂らす
- ウ 至り
- エ 額
- オ 眠り

問十一 傍線部⑧「それぞれの世代の空気を吸い込み、その固有の重力を背負って生きていく」とはどのようなことを述べているのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア それぞれの時代の自由を最大限に享受し、先の不安を見ないようにして生きていくこと。
- イ それぞれの時代の特性を察知し、次の時代がどのようなものか予測しながら生きていくこと。
- ウ それぞれの時代の権力に逆らい、新しい潮流を生み出すようにして生きていくこと。
- エ それぞれの時代の若者の流行を満喫し、年長者からの批判を受けつつ生きていくこと。
- オ それぞれの時代の中で、その時代が持っている不条理を肯定しながら生きていくこと。

問十二 本文中からは次の一文が脱落している。この一文が入る箇所を探し、その後続く五字を抜き出して答えなさい。

好きなことはどこまでも熱心に追求するが、好きになれないものにはほとんど関心が持てないという性格は、今も昔もまったく変わらない。

二次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、出題の都合で小見出しを省いたところがある。(解答は全て句読点、記号も一字に含める。)

おそらく誰もが一度は、水族館のショーで高くジャンプするイルカの姿を見たことがあるだろう。イルカは生物学的にはクジラの仲間、バンドウイルカやハナゴンドウは水族館でもおなじみのクジラであるが、それらを漁の対象にして食べる習慣をもつ地域もある。鯨の漁師たちは「イルカ」という一般名称は使わず、「クロ」「ハナ」「アラリ」「スジ」などイルカ(クジラ)の種類ごとに独自の呼び名を使って漁をする。伝統的に鯨を食べてきた地域の人々は、鯨を「エビス」(海の恵み、神という意味)として崇め、感謝し、人間と同様に墓を建てて供養をする。

このように、一般にわれわれ人間は自然に様々な価値を見出して生活してきた。同じ動物でも教育的価値や商品的価値、学術的価値などを付与された水族館のイルカもいれば、自然保護のシンボルとしての野生のクジラや人道的配慮の対象となるイルカもあり、一方で食の対象として感謝されるイルカもいる。

また、欧米で誕生した環境思想においては、野生動物は人権に準ずる「権利」の主体か、知性や快苦の感受能力にじた「内在的価値」を有する存在とされてきた。たとえば大型のクジラは、近代化の過程で機械油や光源燃料、食料資源、さらにダイナマイトの原料として、油田開発のような大きな規模で乱獲されてきたが、こうした自然物を人間の道具としか認めない「道具的価値 (instrumental value)」への批判から、自然の内在的価値や個々の「I」を尊重する権利の概念が確立されてきた。これらは人間の傲慢を許す「人間中心主義 (anthropocentrism)」の克服をめざして誕生した「自然中心主義 (naturecentrism)」の思想のもと、生態学や進化論も動員しつつ環境倫理の**チュウカク**をなす概念として強調されてきた。

しかし、かけがえのない命の権利は、環境問題の克服のために人類が**イキヨ**すべき普遍的な価値となりえるだろう

か。「かけがえのなさ」という価値はすべての生命に平等に認められる客観的かつ普遍的な価値であるが、われわれはその生命を利用しなければ生きてゆくことすらできない。すると、自然と人間との共生を考えるためには、むしろ「人間にとっての自然の価値」のありようを検討するほうが、より現実的で実践的な方針を立てられるかもしれない——^②「こう考える立場も一方であらわれてくる。自然環境の何をどのように守るのかは、人間の生存や生活と無関係ではいられないからである。」^③

だとすれば、環境問題を克服するために尊重されるべき価値は、かけがえのなさという客観的で普遍的な価値なのか、それとも人間的価値としての多元的な価値なのか。このことを、普遍的価値を示す「クジラ」と、人間にとっての価値を示す「鯨」に置き換えつつ考えてみたい。

地球環境問題のように全員が協力して取り組むべきグローバルな課題には、人類一般に普遍妥当な価値や規範を設けることが必要になってくる。^④まさに自然の内在的価値や権利の概念は、グローバルな課題に向き合う上で最適な価値規範である。しかし現実的には、自然の価値そのものは決して一つではありえない。たとえば自然科学で捉える「クジラ」と、生活や文化のなかでの「鯨」はそれぞれ異なる価値や意味をもち、鯨の価値でさえ地域や個人によって多様に存在する。ここに、普遍的価値を重視する立場（普遍主義）と、「人間にとっての自然の価値」を重視する立場（多元主義）の対立が生じてくることになる。多元主義は、生活や文化、地域によって本来多様である自然の価値が、近代において道具的価値に「矮小化^{*わいしょう}」されてきたことを問題とし、人間の営みに醸成^{じょうせい}される自然の価値がもつ共生関係的な意義を再評価しようとする立場である。

とくに日本では多元主義の文脈で大きな成果があげられており、地域社会のローカルな「自然の価値」の分析をもとに、環境政策のあり方に影響を与えるボトムアップ式の環境倫理学の立ち上げが目指されてきた。たとえば鬼頭秀一は、生活の営みにおける自然との「かかわり」を示す概念に《生身》と《切り身》という語を導入し、環境問題の本質

は「生身」の自然が「切り身」化すること、すなわち自然と人間の関係の切り離しに問題があると指摘した（鬼頭秀一『自然保護を問いなおす——環境倫理とネットワーク』筑摩書房、一九九六年）。彼は、キリスト教を背景とする人間中心主義と、その克服をめざす自然中心主義とともに「人間／自然の二元論」であるとして棄却し、「生業」や「生活」における自然との「かかわり」に（人間—自然）の共生のヒントを探ろうとする。こうした立場は、自然支配的な人間中心主義を批判しつつも、「人間にとっての自然の価値」を重視する点では人間中心であるという意味で、いわば^⑤『批判的人間中心主義』といえるだろう。

しかし、今日の人間的スケールを超えた経済システムや、工場の機械的運動がもたらす大規模な環境破壊や動物虐待などの問題を前に、地域固有の道徳観念のようなバラバラの多元的価値や倫理がどれほどの意義をもつだろうか。すでにわれわれの「食」という営みも、フード・システムによって生産される『切り身』食品の消費そのものである。ここにローカルな価値を持ち出したところで、**Ⅱ** というシステムがナイホウしている破壊性はどのように克服できるのだろうか。この点ではむしろ、すべての生命が等しくかけがえない存在であるという考えや理念のほうが、人類全体で抗すべき問題を克服してゆく力をもっているだろう。だとすれば、自然とよい関係を取り結ぶためには「内在的価値」や「権利」、さらには「持続可能性」「生物多様性」といった普遍妥当で**Ⅲ** を積極的に提起し、これらに基づく倫理的規範に従うべきだと言えそうである。

関陽子「野生の「クジラ」と人間の「鯨」——「自然の価値」から共生を考える」
『環境を守る』とはどういうことか 環境思想入門（岩波ブックスレット）

* 矮小化……不当に規模を小さくすること。

問一 傍線部 a、e のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを平仮名で答えなさい。

問二 傍線部①「水族館」と熟語の構成が同じものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 衣食住 イ 絵葉書 ウ 親孝行 エ 未公開 オ 酸性雨

問三 空欄 I に入る語句を本文中から八字で探し、抜き出して答えなさい。

問四 傍線部②「こう考える立場」において重視されるものは何か。本文中から二十七字で探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問五 傍線部③「ない」と同じ意味用法のものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 厚手のコートを購入したので寒くない。
イ 彼はなかなか自分の意志を曲げない。
ウ 雨が降っているので街に人が少ない。
エ かばんの中に入れたはずの財布がない。
オ そんなに水を流してはもったいない。

問六 傍線部④「まさに自然の内在的価値や権利の概念は、グローバルな課題に向き合う上で最適な価値規範である」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然と人間の関係性を考えようとする姿勢は、環境問題解決に向けて全世界に必要なだから。
- イ 人間にとって価値のある自然を尊重する立場は、人類全体で抗すべき問題を克服する力をもつから。
- ウ あらゆる生命を等しく尊重する態度は、人種や国境を超えて共通の認識となりうるから。
- エ 自然に多様な価値を見出す概念は、人間にとって現実的であり受け入れやすいものだから。
- オ 人間が自然を都合よく利用する慣習は、今後も人間が生存していく上で不可欠な概念だから。

問七 傍線部⑤「『批判的人間中心主義』について説明した次の文の空欄 [i] [iv] に入る語を、本文中からそれぞれ二字で探し、抜き出して答えなさい。ただし、同じ記号の空欄には同じ語が入る。

[i] と	[ii] の分離を環境問題の本質的な課題ととらえ、	[ii] を	[iii] として扱うのではなく、	[i]
の営みと	[ii] との	[iv] をめざそうとする立場。		

問八 空欄 [II] に入る語句として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

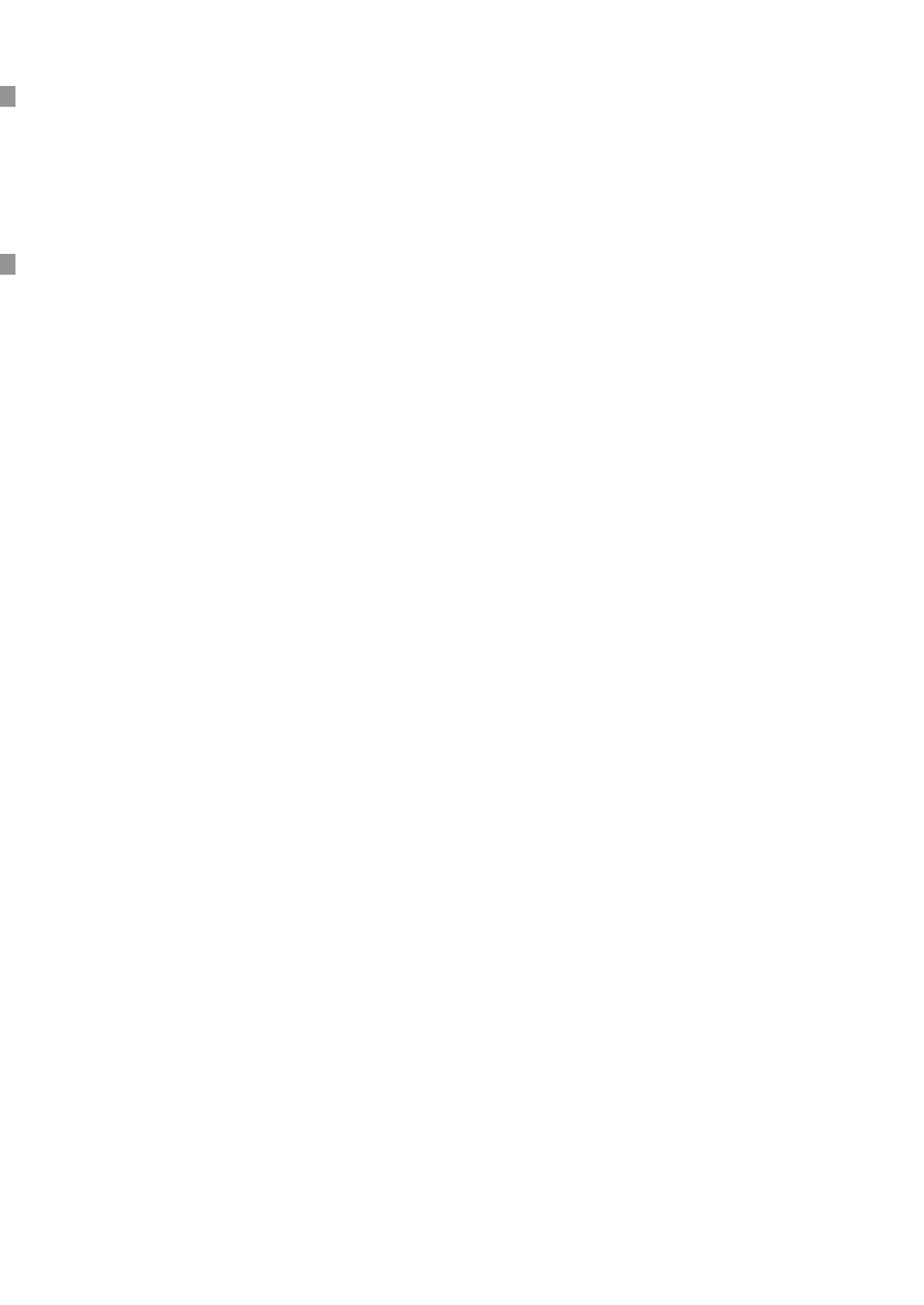
- ア 生命の商品化
- イ 経済の近代化
- ウ 地域の個別化
- エ 思想の多様化
- オ 文化の均一化

問九 空欄 Ⅲ に入る語句として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 生物学的な価値
- イ 教育的な価値
- ウ 多元的な価値
- エ グローバルな価値
- オ ローカルな価値

問十 本文の内容に合致するものには○を、合致しないものには×を、それぞれ記入しなさい。

- ア 野生動物は、様々な文化やそれぞれの地域において価値や意味を与えられてきた。
- イ 国際社会における課題を解決するためには、自然の価値を一つに限定する必要がある。
- ウ 地域固有の道徳観念に基づく経済システムが、環境破壊や動物虐待をもたらした。



国語解答用紙

受験番号
氏名

	得点
	点

一、問一

a
b
c
d
e

問二

I
II
III
IV

問三

問四

問五

問六
A
B

問七

初め
終わり

問八

問九
問十

問十一

問十二

二、問一

a
b
c
d
e

問二

問三

問四

初め
終わり

問五

問六

問七

i
ii
iii
iv

問八

問九

問十

ア
イ
ウ